

瓦 塔 瞥 見

高 崎 光 司

はじめに

以前に於いて、筆者は平面形が方形を呈する瓦塔について小論（高崎1989）を発表したことがある。その目的は最も多くある形態の資料を軸に、形式的な変化等、資料を検討する上で基本的な問題提起を行うことにあった。その過程では分析の都合上、層塔の形状の資料のみを対象とし、堂の形状のもの等特殊な資料については、除外せざるをえなかった。しかし、埼玉県の東山遺跡、千葉県谷津遺跡出土の資料のように、堂・塔がセットで出土している場合は、そのあり方そのものに瓦塔を理解する上で重要な情報を呈示しているといえる。本稿においてはこの堂の形状の資料に視点をおいて、問題点を探ってみたい。

名称について

屋蓋の形が入母屋造りの資料を通例的に「瓦堂」と称しているが、現段階では筆者もこの名称が相応しいと考えている。しばし、「瓦金堂」という呼び方に接することがあるが、あまり適切であるとは言えない。金堂という名称は限定された呼び名であるからである。入母屋造りであるから金堂である、とは断定できないのではないだろうか。鋳葺きならば、かなりの蓋然性はあるだろうが、入母屋造りの講堂、鐘楼などは存在する。したがって、塔の屋蓋ではない屋蓋、および平側、妻側の区別のある軸部にたいしては、「堂」形状の瓦製品という意味を付して、「瓦堂」と称すべきであろう。将来的に、赤堀茶臼山古墳出土の家型埴輪のように、細部にわたり建築意匠が表現され、建物の種類が特定できるような資料に恵まれた時には、より細かな名称を検討する必要も生じる、ただし、塔と堂の2個体のみが出土している場合には後者を金堂として認識することはできよう。

では次に瓦堂という名称を使用することになると、瓦塔と瓦堂とは異種の遺物として扱わなければならない。しかし、それは誤りであることは言うまでもない。また、基本的に仏教寺院の建造物を模造した物に何らかの総称を与えねばならないとすれば、瓦塔という名称が最も適切であろう。すなわち、「瓦塔」は、従来通りの塔形状の資料の名称であると同時に、塔ならびに堂形状の瓦製品の総称もかねることになり、複合的な意味を持つことになる。

以上に述べたことは、若干くどいくらいもあるが、用語について明確にしておくことは、裏返せば瓦塔という遺物をどういう観点で捉えるかということにもつながると考える。

資料の検討

瓦塔に比べると、瓦堂はきわめて少量しか発見されていない。管見にふれた資料は以下の通りである。

出土地	遺跡名	遺跡種別	出土資料	典拠
宮城県多賀城市	多賀城廃寺跡	寺跡	堂・塔	多賀城調研1975
群馬県伊勢崎市		不明	堂	註 1
群馬県桐生市		不明	堂	註 2
栃木県上三川町	薄市	集落跡	堂・塔	上三川町1988
埼玉県岡部町	藤の木	不明	堂	石村喜英1973
埼玉県美里町	富士山台	不明	堂	横川好富1980
埼玉県美里町	東山	集落跡	堂・塔	埼玉県1980
埼玉県日高町	若宮（女影廃寺）	寺跡	堂	日高町1983
埼玉県狭山市	宮地	集落跡	堂	狭山市1986
千葉県八千代市	白幡前	集落跡	堂・塔	註 3
千葉県千葉市	谷津	集落跡	堂・塔	千葉県埋文1986
千葉県市原市	子供の国	集落跡	堂	註 4
不明		不明	堂	註 5

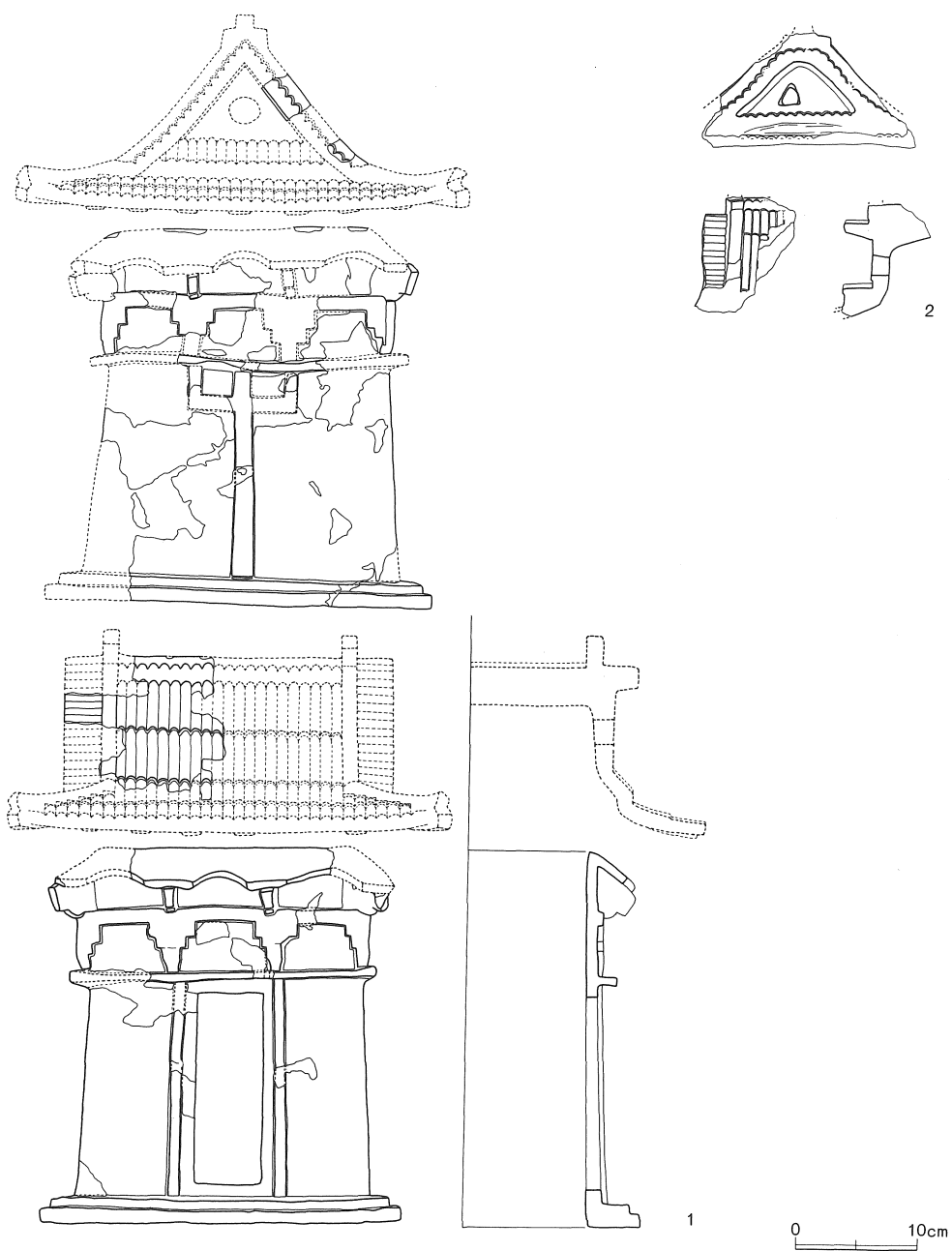
以上、筆者の資料調査が完全ではないために、まだこれ以外にも出土例は若干あるものと思われる。しかし、いずれにしても、関東以北に集中していることは異論がないだろう。とくに埼玉、千葉といった地域に多く出土しているが、単に当地域が瓦塔の出土数が多い、ということの反映だけではないと思われる。

では、具体的な資料の検討に入りたい。ただし、資料の中には未報告のものも多いため、今回、図示できるものは限られている。

東山遺跡出土瓦堂（第1図の1）

焼成は土師質で、軸部の成形は粘土板作りである。二重基壇で、平側の長さは30cm、妻側は32cmに復元されている。わずかだが妻側の方が長い。平側は両壁面とも3間構成で中央の間を開口し、上下に直径0,5cmの軸ずりの穴が穿たれている。台輪の上には高さ約2cmの大斗が乗り、さらに粘土帯作りによる壁付きの斗と通肘木が表現される。持ち送りは通肘木上につけられ、尾垂木と一体化する。軸部上端からの張りだしは持ち送りにあわせて突出するが、手先三斗状の表現はない。隅の持ち送りは斜め方向につけられる。妻側は中央に柱が一本のみ作られるが、柱の上部は三叉状に別れ、その上に斗拱が対応している。従って、妻側は台輪を境にして、間数が異なっていることになる。屋蓋は出土した破片が少ないため、細部までは把握できないが、入母屋造りの模造であることは間違いない。半裁竹管状工具により幅0、6cmの丸瓦が表現される。平側の地は継目が2ヵ所にあるが、復元されている通りさらに下にも数ヵ所あるものと思われる。大棟にも側面に丸瓦が付けられるが、棟込瓦の表現であると推定される。妻側はほとんどが推定復元であるが、破風の掛瓦は平側と同様に表現される。降棟は隆帯状に作られる。

塔と比較すると大斗の形が堂の方でより写実的である点等、わずかに違いも見られるが、製作技法や表現上の特徴といった基本的な部分では両者はまったく同一である。



第1図 瓦堂（1. 埼玉県東山遺跡出土 2. 同県美里町関富士山出土）

富士山台出土瓦堂（第1図の2）

屋蓋だけであるが、土師質焼成の入母屋造りで、東山遺跡の瓦堂にきわめて近似している。半裁竹管状工具による丸瓦は幅 0、7cm。平側の地は継目が2ヵ所以上施される。大棟には東山例と同様に丸瓦が棟込瓦として表現されている。また、端部には鬼板状の立ち上がりが若干だが見受けられる。降棟も幅約 1、1cmの隆帯で表される。妻側は破風の掛瓦の他に、破風下とさらに段を違えて、その下に丸瓦が作られる。表現上は写実性に欠けるが、従来から指摘されているように、この2段からなる地葺きを鍔葺きの表現と捉えておいてよいだろう。なお、破風の中央には一辺 1、7cmの不整形な三角形の穴が外面からヘラで穿けられているが、これは家型埴輪と同じく焼成のための処置と思われる。裏面はていねいにヘラケズリが施されているが、軒裏は欠損しているため垂木等の表現は不明である。

若宮遺跡出土瓦堂（第2図の1）

この資料も屋蓋だけであるが、土師質焼成で入母屋造りという点で前述のものと同じである。半裁竹管状工具による丸瓦は幅 0、6cm、工具の厚みにより瓦列の間隔はやや離れている。平側には継目が軒先の他に屋根勾配の変換点付近にも施されている。これは妻側と対応させると、鍔葺きの表現であると考えられる。降棟、隅棟ともに幅 1、2cm前後の隆帯で表される。妻側は前例と同じく掛瓦が丸瓦で作られ、地葺きは2段でやはり破風下に丸瓦が表現されている。鍔葺きと見てよいだろう。図示できなかったが、他に大棟部分の小破片が出土しており、丸瓦の棟込瓦が表されている。軒は一軒で 3、5 ～4、0cm間隔で削りだされる。

八津遺跡出土瓦堂（第2図の2）

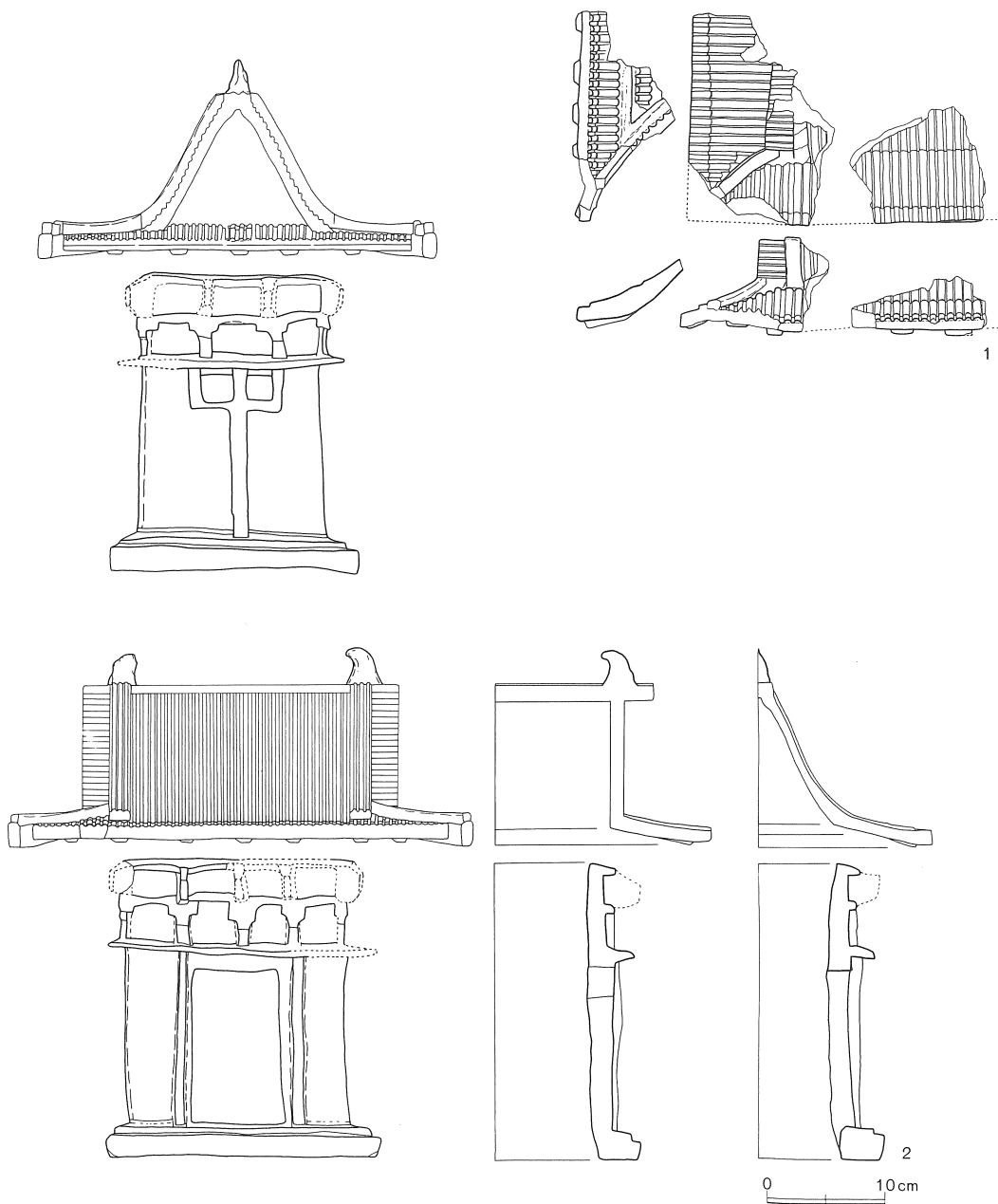
土師質焼成で赤褐色を呈する。軸部の成形はこの地域に例の多い粘土紐作りだが、基本的な表現構成は東山例に共通する点が少なくない。基壇は二重基壇で平側が23、5cm、妻側が21cmである。軸部は平側3間、妻側が柱間で2間、組物で3間である。軸ずりの穴はない。台輪の上にT字形の斗を乗のせ、通肘木と合わせて粘土帯作り。持ち送りは尾垂木と一体化した側面が台形状の突出で表現される。妻側の柱上は三叉状になり、三叉の間を窓状に開口する。屋蓋は半裁竹管状工具による丸瓦表現の破片が少量と鴟尾らしき部分の破片があるだけで、屋根形状等の全体は不明である。本例は東山例と比べると軸部の作り方など共通する点が多いが、組物が簡略であること、軸ずりの穴が省略されること等、わずかに後出的な要素がある。

宮地遺跡出土瓦堂（第3図の1）

屋蓋の一部であるが、入母屋部分である。半裁竹管状工具により幅 0、9cmの丸瓦が作りだされている。降棟は幅が狭く断面が突出した形を呈している。破風の掛瓦も表現される。裏面は比較的にていねいなヘラ削りが施される。焼成は土師質。基本的には他の埼玉県出土のものによく似ている。

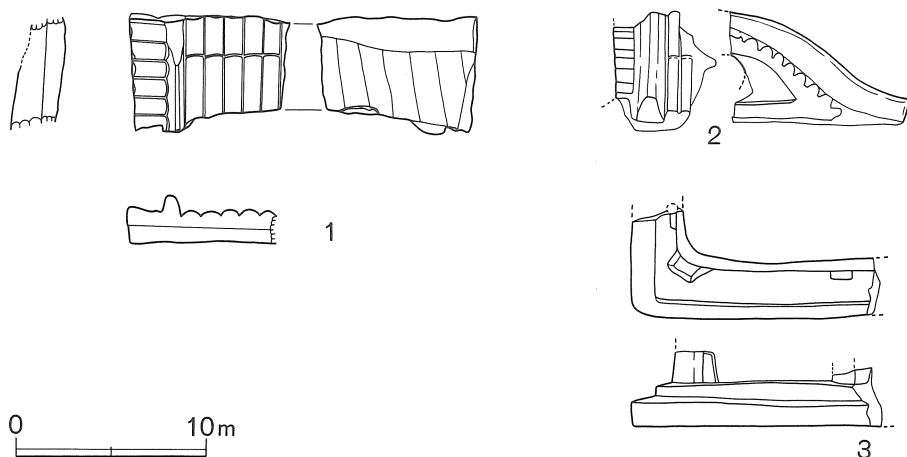
薄市遺跡出土瓦堂（第3図の2、3）

出土資料の中に二重基壇の破片が3点あり、その内の1点（第3図の3）が堂のものと推定される。すなわち上層の壁体はいずれも小ぶりであり、基壇部分もそうであるとすれば、軸ずりの穴をもたない側で隅から離れている柱を、東山、谷津例のように妻側中央の柱と見ることができる。したがって妻側においては基壇下部の復元長が22cmとなる。屋蓋も小ぶりで半裁竹管状工具による幅



第2図 瓦堂（1．埼玉県若宮遺跡出土 2．千葉谷津遺跡出土）

0、5cmの丸瓦、断面が台形の降棟、破風の掛瓦が表現される。破風下の瓦葺きは不明。破風の中央には円形となるであろう穴がへらにより開口される。入母屋作りである事は他例と同じであるが、屋根の照起が当例では強調されている。土師質焼成で細部の表現や技法の上で伴出している塔と同一である。



第3図 瓦堂（1．埼玉県宮地遺跡出土 2・3．栃木県薄市遺跡出土）

今回は図で示せなかったが、他の注目すべき資料について触れておく。

多賀城廃寺跡出土瓦堂

大棟、降棟の表現のある屋蓋片が出土している。地葺き、掛瓦ともに半裁竹管状工具による丸瓦で、地葺きの継ぎ目は4節以上ある。

白幡前遺跡出土瓦堂

土師質焼成。屋蓋だけだが入母屋造り鉋葺きを如実に示している。他例と同様に半裁竹管状工具による幅 0、5cmの丸瓦表現で、降棟、隅棟が隆帯状に作られる。注目されるのは鉋葺きで、妻側だけでなく平側にも瓦列の段差を設けている。しかも上段の丸瓦は隅棟の際まで作りだされており、きわめて写実的である点は他例に優っている。破風部中央にはスリット状にヘラ切りの穴が開けられている。裏面はていねいなヘラ削りが施されるが、軒先までは残存せず垂木の形状は不明。伴出している塔と製作技法や焼成の具合は同一である。

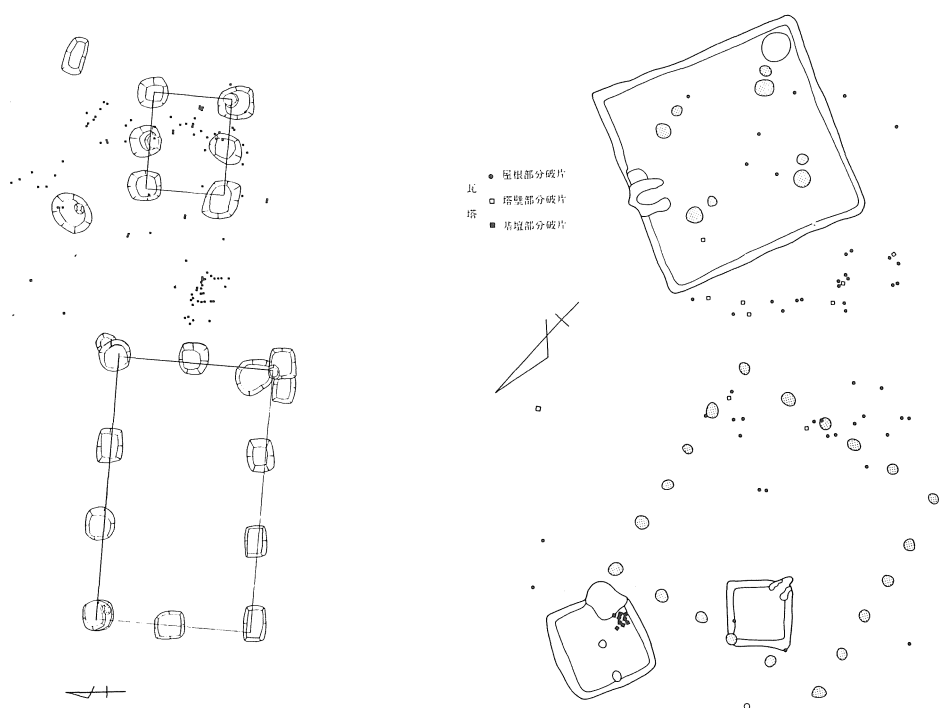
子供の国出土瓦堂

土師質焼成。軸部および組物は谷津例に似ているが、妻側中央の柱の上部は三叉状にならない。屋蓋は入母屋造りで大棟の頂きには2本の丸瓦列状の造作があり、その両脇に棟込瓦として丸瓦が表される。同資料中には接続部位は不明だが、裳階の屋根と思われる短い軒が廻る壁体があり、興味深い。

以上、管見に触れた資料は少ないがこれまでの知見をまとめると、瓦塔はいずれの資料も類似していることが指摘できる。

軸部は塔の場合は3間四方であるのにたいして、堂は妻側を柱間2間組物3間で作っている。これは写実的ではないが正面、側面の区別がない塔と異なり、妻側を開ける必要のない堂の場合はその区別を強調するため意識的に行われたと捉えることができる。

組物については、手先の表現や斗拱などが簡略化されていることがあげられる。技法上では斗と肘木を、壁体に貼りつけた一本の粘土から切り出す粘土帯作りが主である。



第4図 瓦塔の出土状況（左、東山遺跡、右、谷津遺跡）

屋蓋はすべての資料が半裁竹管状工具による丸瓦だけが作られる。妻側の掛瓦や鍔葺きなども共通した表現を取っている。

さらに焼成の状態はいずれも土師質であり須恵質の資料は管見の限りでは皆無である。

これらの類似性は資料の製作年代にも関わってくる。筆者は先の試論（高崎1989）に於いて、瓦塔の四時期区分を試みたが、その基準が無論瓦堂についても該当することは言うまでもない。結論から言えばここで取りあげた瓦堂はⅡ期末～Ⅲ期（8世紀末～9世紀前半）に置くことができる。前述のように斗拱表現の簡略なこと、焼成が土師質であること、丸瓦が半裁竹管状工具によることなどがその根拠である。このことは伴出している遺物からもある程度裏づけられる。例えば、東山遺跡では8世紀末頃の土師器と伴い、薄市遺跡では9世紀初頭の土師器と共に住居跡床面から検出されている。ただし、土器の編年そのものも絶対ではなく、それに引きずられるものではない。

出土状況についても触れておかねばならない。一般に瓦塔は現位置を保っていることは少なく、竪穴住居や溝に廃棄された（谷津遺跡、白幡前遺跡）とか、遺跡に伴わず表土層中に混在していたなどのあり方が多い。したがって元の置かれた環境を知る手がかりを捜すのは困難をきわめる。ただし、状況認識的に遺構との関連を匂わす調査例はある。東山遺跡、谷津遺跡、白幡前遺跡に見られるように、瓦塔の分布する近辺に掘立柱建物跡があることである（第4図）。すでに先達が指摘しているように、これらの建物こそ瓦塔を安置していた覆屋にほかならないと考えるのは無理からぬことであろう。

結びにかえて

8世紀末から9世紀始めという時期に東国の瓦塔には塔と堂という組み合わせが登場する。ところで、塔が単独である場合と、塔と堂がセットである場合とでは意味合いが違ふと考えられる。塔単独の場合は舍利容器としての本来的ないわゆるストゥーパであり、機能的には木造塔の単なる模造ではない。堂の場合は仏を納める厨子としての側面も当然考えられるが、しかし両者が並び置かれるに至ると容器としてのあり方にくわえて視覚的な効果から小伽藍的空間が生みだされることになる。極言すればこれはまさに寺院そのものではないだろうか。もちろん、瓦塔それのみが寺であるというわけではなく、教典や仏法を司る人員の存在があつて初めて仏教寺院の体裁が整うのであろうが、現在のところそこまで立証するには至らない。しかし、すくなくとも瓦堂の登場は、奈良～平安時代の変革期に於いて仏教文化が社会の広い層にまで浸透し始めたその一端を物語るのであり、逆に言えば当時の社会の状況がそういった宗教的空間を必要としていた事に他ならないのである。

謝辞 本稿をまとめるに当たり、津金澤吉茂、秋元陽光、横川好富、中島 宏、利根川章彦、中平 薫、小淵良樹、須田 勉、田所 真、部 淳一、大野康男、の方々から資料調査の際お世話になり、また多くのご教示を頂いたこと、記して感謝申し上げます。

註1 津金澤氏の御教示によれば、伊勢崎市昭和町から入母屋の資料が出土している。

註2 津金澤氏の御教示による、菱町郷土史編纂委員会編「菱の郷土史」1970に記載あり。

註3 千葉県文化財センターで整理中。

註4 市原市文化財センターで整理中。

註5 「天平地宝」に個人蔵資料として掲載されている。

参考文献

石村喜英 埼玉県内における瓦塔（上・下） 埼玉文化史研究 4・5 1973

宮城県多賀城跡調査研究所 年報1975 1975

埼玉県教育委員会 埼玉県遺跡発掘調査報告書 第30集 甘粕山 1980

横川好富 埼玉県美里村出土の瓦塔 考古学雑誌 第66巻 2号 1980

日高町教育委員会 若宮 第3次発掘調査概報 1983

狭山市教育委員会 狭山市史 原史古代資料編 1986

千葉県文化財センター 千葉急行線内埋蔵文化財発掘調査報告書 2 1986

上三川町教育委員会 薄市遺跡・大山遺跡 1988

高崎光司 瓦塔小考 考古学雑誌 第74巻 3号 1989